

## カルデニオ像の比較—グリューフフィウスの 『カルデニオとツェリンデ』とアルニムの『ハレ』から

小崎 肇

### 0. はじめに

アンドレアス・グリューフフィウスの戯曲『カルデニオとツェリンデ』は彼の四番目の悲劇に当たる。タイトルにもなっている主人公カルデニオはボローニャの大学生であり、この町で出会った女性オリンピエに求婚するが、父の代理として故郷に戻っている間に彼女との連絡が途絶えてしまったことにより、花嫁を恋敵に奪われてしまう。そこで彼は復讐をするためにボローニャに戻るが、復讐決行の直前、オリンピエの姿をした幽霊と遭遇し、欺瞞に遭うことで、自らの傲慢を理解し、改心をする。この作品自体は発表当時にはそれほど注目されなかった。その後グリューフフィウスは啓蒙主義の時代に、文学史上「戯曲詩人の始祖」と呼ばれようになり、十九世紀にいたるまでエピグラム作家という評価がなされた。<sup>1</sup>

十九世紀に入りシェークスピアの作品がロマン派詩人たちを魅了したのと同時期に、グリューフフィウスについてもロマン派の詩人たちにより再評価が始まった。具体的には 1830 年までに 10 を超える翻案作品が複数の詩人たちにより発表されている。『カルデニオとツェリンデ』はそのうちの三作品で原案となった。

この中でアルニムの翻案は、オリジナルの内容となる第二部『イェルサレム』を加えた壮大な作品となっている。一方でグリューフフィウスの戯曲を底本とする第一部『ハレ』は、当時の大学生の生活を大幅に加筆し舞台もボローニャからハレへと変更されドイツ化された作品として発表された。

すでに言及しているように、どちらの戯曲も「大学生」を中心に据えた作品となっているが、双方でその扱いは異なる。本拙稿では、この双方の違いを「文学における大学生像」の系譜に沿って、特に主人公カルデニオを通して考察することを目的としている。

まずは、文学における学生像の系譜をたどり、その後、二つの作品の位置づけ、比較を行う。

---

<sup>1</sup> Vgl. Dieter Martin: Rezeption durch die Romantiker. In: Gryphius-Handbuch. hrsg. v. Kaminski u. Schütze, Berlin / Boston (De Gruyter), 2016, S.791.

## 1. ドイツ文学における学生像

文学における学生像あるいは学生文学については、ニムッツの論文を参照しながら概観する。中世の大学成立後に学生像が文学に取り入れられたのはまず詩作の分野からである。十二世紀から十四世紀に「Goliarden」や「Vaganten」といった「遍歴学生」<sup>2</sup>を詩の題材にしたものが伝えられている。その題材はとりわけ神学生だった。この頃の大学は各地に点在していたため、知識を積み上げるためには大学間の移動が必須であったが、同時に、他国への放浪は道徳的堕落、経済的零落と隣り合わせの時代だった。そのため詩の内容も、金の無心や勉強からの落伍、僧や聖職者からの警告などが主なテーマとなっており、有名な『カルミナ・ブラーナ』などの題材ともなっている。また、ヘルディングの手稿は、放浪学生歌集としてペーマーにより編集された。<sup>3</sup>

十五世紀に入ると、ドイツ国内でも複数の大学が成立し、それぞれが独自に発展し始める。諸侯により大学に権限が付与されるとともに、旧来の学問、規則への批判と改革が行われた。さらに宗教改革が始まると、大学における修道院的管理が廃止され、学生の移動の自由が認められるようになる。<sup>4</sup>

この頃、学生像の描写が取り上げられているのは主に学者の文書だった。大学改革の観点から、人文主義者による下級学校とその生徒への批判が行われた。この時代にはまだ大学生は知識、徳ともに高いとみなされており、取り上げられているのは「Beanus」と呼ばれる新入生の未熟さや愚鈍だった。そこから、新入生たちは心を入れ替え、大学生として成長しなければならないと文書で主張がなされた。この流れから、「Handbuch」などの手引き書による教化が大学で行われた。<sup>5</sup>

アカデミックの世界以外では、「謝肉祭劇」(Fastnachtspiele)<sup>6</sup>のような大衆芸能が広まり、その中に学生が登場した。しかし、まだ大学生像に特定のモチーフは存在してはいなかった。<sup>7</sup>「Facetie」<sup>8</sup>と呼ばれる笑い話や民衆本にも大学生が取り上げられた。特に民衆本では、事実に基づいた恋愛がらみの話しが後の文学に大きく影響したと言われる。<sup>9</sup>

<sup>2</sup> もとは「放浪者」をさす単語だが、狭義で遍歴する大学生の意味が付け加えられた。

<sup>3</sup> Vgl. Herbert Nimtz: *Motive des Studentenlebens in der deutschen Literatur von den Anfängen bis zum Ende des achtzehnten Jahrhunderts*. Würzburg (Triltsch), 1937, S. 1ff.

<sup>4</sup> Vgl. ebd. S. 11.

<sup>5</sup> Vgl. ebd. S. 11 – 15.

<sup>6</sup> 十五世紀半ばに発生した謝肉祭の時期に行なわれた世俗劇。旅館のレストランなどで簡素な形式で上演された。比較的長めの筋のあるタイプと短い小品をつなげたレビュー形式のタイプに分かれる。Vgl. Volker Meid (Hrsg.): *Sachwörterbuch zur deutschen Literatur*. Stuttgart (Reclam), 1999, S. 168f.

<sup>7</sup> Vgl. Nimtz, ebd. S. 28.

<sup>8</sup> ラテン語による短い小話。Facetie とも。Anekdote, Witz などの他の短い形式のジャンルとの境界ははっきりせず、ドイツでは Schwank と同化した。日常生活、とりわけ聖職者や大学の性的話題を批判的にテーマとした。Vgl. Meid, ebd. S. 169.

<sup>9</sup> Vgl. Nimtz, ebd. S. 38 – 42.

十六世紀に、ついに学生戯曲と呼ばれるものが登場する。この時代に主流となっていたのは放蕩息子モチーフとした教育劇「Prodigusdrama」であった。聖書に由来するこのジャンルは、より贅沢な生活を目指す息子が出奔するも悪徳に容易に陥り、あわれな生活を送ることと後悔し、帰郷して改心するという筋立てになっている。この放蕩息子劇は「Schuldrama」<sup>10</sup>として学校の道徳、話術の教化の手段として必要なものとみなされていた。<sup>11</sup>このジャンルから最初の学生戯曲と呼ばれる作品が登場する。ステュメリウス<sup>12</sup>のラテン語劇「Studentes」は放蕩息子劇の筋書きに、学生生活の場面を豊富に取り入れた作品であった。その生活のイメージは主に、宴会、職人とのケンカから市民との諍いへと騒動が大きくなるといったもので、当時としては生き生きとした学生生活の場面を描出している。この作品の影響は十八世紀ドイツの儀礼喜劇まで続く。<sup>13</sup>

また、その後の学生戯曲の原型となるヴィヒグレヴェ<sup>14</sup>の「追放されたコルネリウス」(„Cornelius Relegatus“)が1600年に発表された。作中では、生活の描写がより詳述され、デポジション<sup>15</sup>のような大学の慣習の場面も取り入れられた。この作品により「コルネリウス」は当時の大学生の代名詞ともいえる存在となった。<sup>16</sup>

十七世紀に入り、大学生の登場する主な形式は、戯曲から小説へと変化し、その内容も多様化していく。まず学生像は、多種多様な状況が必要とする悪漢ドラマに取り込まれることでその活躍の場を広げていった。これに、教化を目的とした如才ない世渡りの能力を身に付ける必要性が組み込まれる。この要請に沿って、文学における学生像は悪漢小説から啓蒙主義的小説に拡大していき、さらに性愛的小説にいたるという変遷を遂げていく。<sup>17</sup>

---

<sup>10</sup> 初期近代の教育劇。ルターの推奨により、プロテスタントのラテン語学校でレトリックやプレゼンテーションの練習のために演じられた。Vgl. Meid, ebd. S. 471ff.

<sup>11</sup> Vgl. Nimtz, ebd. S. 49ff.

<sup>12</sup> Stymmelius, ドイツ語名 Christoph Stummel(1525-1588)。フランクフルト・アン・デア・オーダーの商人の息子として生まれる。ルター派神学者。Vgl. Gottfried von Bülow: Stymmelius, Christoph. In: Allgemeine Deutsche Biographie. Band 37, Berlin (Duncker & Humblot), 1971, S. 98f.

<sup>13</sup> Vgl. Nimtz, ebd. S. 51 – 54.

<sup>14</sup> Albert Wichgreve(1575-1619)。ハンブルクの説教師の息子として生まれる。教育者、説教師。Vgl. Johannes Bolte: Wichgreve, Albert. In: Allgemeine Deutsche Biographie. Band 42, Berlin (Duncker & Humblot), 1971, S. 310ff.

<sup>15</sup> Deposition: 十五世紀に発生した新入生虐待劇。学生としてのイニシエーション儀式として半公式的に大学で行なわれた。菅野瑞治也:ブルシェンシャフト成立史 (春風社) 2012, 27 頁参照。

<sup>16</sup> Vgl. Nimtz, ebd. S. 56ff.

<sup>17</sup> Vgl. ebd. S. 115.

## 2. バロック期の大学生－グリューフィウス『カルデニオとツェリンデ』<sup>18</sup>

ちょうどこの時期は、グリューフィウスの活動した時代と重なる。しかし、彼の作品は学生像を扱った文学の潮流とは異なった作風である。同時に、グリューフィウスの他の作品と比較しても『カルデニオとツェリンデ』は例外的な作品といわれる。グリューフィウスの悲劇は、当時の作劇法に沿って王族による国家的ドラマとして描かれるが、この作品では王族は登場しない。また殉教者劇の改宗モチーフが扱われていない点などが挙げられる。<sup>19</sup>

では、学生像に注目するとどうか。この作品における学生像は、物語の筋にほとんど影響せず、大学生としてのカルデニオにフォーカスした部分もそれほど多くはない。それは物語の第一幕、カルデニオのモノログにある。そこで内容に触れる前に、舞台について取り上げておく。『カルデニオとツェリンデ』では冒頭の内容紹介において、「舞台は学問と自由な芸術の母、ボローニャ」(C 236)と記されている。グリューフィウスは、作品の原典としてスペインのモンタルヴァンの作品『失望の力』のイタリアもしくはフランス語の翻訳を使ったと考えられているが、<sup>20</sup>このオリジナルでは舞台はスペインの大学街アルカラだった。グリューフィウスは舞台設定をボローニャに変更したのだが、その理由はどのようなものだろうか。「学問の母」と述べられているようにボローニャはヨーロッパ最古の大学町である。グリューフィウス自身も、家庭教師時代にパトロンに同行した留学旅行の際にこの街をおとずれたと伝記に伝えられており、<sup>21</sup>わずかながらの縁があったと考えられる。また、大学町であることを印象づけるためにはアルカラよりもボローニャという地名の方が有効であっただろう。

ただし、これは作中では背景に留まっており、戯曲の筋が進むなかで大学についての直接的な言及はほとんどない。第一幕の冒頭でカルデニオが「学問の街」と述べた後、その場にいた経緯を語る中で、次のような部分が上げられるぐらいである。

わたしは(正しいところでは)11 年を二回数えた。  
わたしを両親の助言がたゆまぬ願望にしたがって  
この場所に送り出したとき、途絶えぬ勤勉によって  
学問と、深淵なる学問の虚飾のない賞賛を  
手にいれるため！ ああもちろんよかれと思っていた！  
Jch zehlte (wo mir recht) die zweymal eilfften Aehren /

<sup>18</sup> 作品からの引用は Andreas Gryphius: Cardenio und Celinde, In: Gryphius Dramen, hrsg. v. Eberhard Mannack, Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker), 1991, S. 227 – 306.に拠る。以下、同書からの引用は(C 227)の様に頁数を示す。

<sup>19</sup> Vgl. Roger Paulin: Gryphius ‚Cardenio und Celinde‘ und Arnims ‚Halle und Jerusalem‘. Tübingen (Niemeyer), 1968, S. 3.

<sup>20</sup> Vgl. Eberhard Mannack (Hrsg.): Kommentar (zu Gryphius Dramen, „Cardenio und Celinde“). In: Gryphius Dramen, ebd. S. 967. u. a.

<sup>21</sup> Vgl. Ralf Georg Bogner: Leben. In: Gryphius-Handbuch. ebd. S. 14.

Als mich der Eltern Rath nach embsigem Begehren /

an disen Ort verschickt / durch unerschopfften Fleiß<sup>e</sup>

Zu kauffen Wissenschaftt und nicht geschminckten Preiß

Durchaus gegrundter Lehr! Ach freylich wol gemeinet! (C 239)

22歳になったカルデニオは両親の意に従いボローニャを訪れ、そこで脇目も振らず勉強に励んできたことを語る。その結果として、彼は当時の貴族の理想像ともいえる教養と技能を習得した。

わたしは教え、教えられた、そして年々賢明になった  
いくらかの灰色の髭がわたしの黄色い髪の上にこわばった  
わたしは身体もあらゆる技のために鼓舞した  
足の速い馬に飛び乗り、疾走した。  
リュートの演奏を理解し、さわやかに歌うことになじみ  
ダンスで身を動かし、格闘の技を心得た！  
そして、(みずからについて真実を述べるのだが)  
わたしには、剣は軽い羽のごとく似つかわしい。

Jch lehrt und ward gelehrt; und kluger vor den Jahren /  
Manch greisser Bart erstarrt ob meinen gelben Haren /

Auch muntert ich den Leib zu allen Künsten auff /  
Sprang auff ein hurtig Pferd / begab mich in den Lauff /  
Begriff das Lauten-Spill / gewohnte frisch zu singen /  
Bewegte mich im Tantz / verstund die Art zu ringen!  
Vnd (wo ich von mir selbst die Warheit melden kan)  
Der Degen stand mir gleich der leichten Feder an. (C 240)

しかしながらその成果によってカルデニオは人格者となったわけではなく、むしろ周囲のものにとってやっかいな人間へと変貌していく。

ああ、残念ながら！この名声に魅惑されてしまった。  
きみは正しい的を射ているね。暗闇がわたしをとらえた！  
わたしは、そのことが自分にとってふさわしくなることなどありえない、と思っていた  
それは、善からわたしをそらす最初の道だった  
それはわたしの心を揺さぶる最初の毒だった

誰かがわたしの前を横切り、隙を見せたならば  
拳が準備され、刃が閃いた。  
そのため徐々に、わたしのさまよう榮譽は病んでいき、  
わたしはあちこちで激しい喧嘩屋と呼ばれた。

Ach leider! disen Ruhm den ließ ich mich bethoren.  
Du triffst den rechten Zweck! der Dunkel nam mich ein!  
Ich glaubt es konte mir kaum einer gleiche seyn.  
Diß war die erste Bahn die mich von gutem führte:  
Das war die erste Gifft die meine Sinnen rührte.  
Kam jemand mir die quer und gab sich etwa bloß:  
So war die Faust bereit / so ging die Klinge loß.  
Hiedurch ward allgemach mein irrend' Ehre krancker /  
Man his mich hir und dar den unverzagten Zanker: (C 240)

後の解釈で「暴れん坊」(Raufbold)<sup>22</sup>と評価されるように、大学生としての品位を失い暴走するカルデニオの前に現れたのがオリンピアだった。あるとき町でオリンピアを見かけ、カルデニオの荒々しい性格は彼女の礼儀を前にして影を潜める。まさに彼は彼女に惚れ込んでしまった。

作中、大学生としてのカルデニオに直接、言及されているのは、主にこの出自と、オリンピアとのなれそめについてである。それゆえ、学生戯曲として見たこの作品は、特段取り上げるべきものではないかもしれない。

ここで使用しているテキストの編者であるマナックはこの大学生像について少し踏み込んだ解釈を行っている。グリューフiusがこの作品の下地として別の作品を参照したことは前述したが、その際に舞台を敢えてボローニャに変更した点に注目する。そして、この「学問の町」の大学生であるところにグリューフiusの批判精神があると指摘している。カルデニオが自負する教養はルネサンス期の理想であり、ある意味で天才的な才能だった。しかし、それはすでにバロック期の人であるグリューフiusには危ういものに思えたのではないか。カルデニオは大学性として研鑽を積み、理性的な大学生だったと思われる。近代的な視点からは共感の対象となるかもしれない。しかし、その理性は不安定であり、容易に暴走することをグリューフiusは見逃してはいない、むしろ懐疑的にとらえている。<sup>23</sup> マナックの解釈から敷衍できるのは、この作品での大学生とは〈理性〉を具現する存在だという点である。

他方で、作中に出てくる„Verstand“などの単語は、アカデミックにおける万能の理性をさ

<sup>22</sup> Nimtz, ebd. S. 132.

<sup>23</sup> Mannack, Kommentar, ebd. S. 972f.

していると単純に当てはめることはできない。パウリンは本作品における「Vernunft」, 「Verstand」, 「Tugend」の三つの単語が同義で扱われており、その背景にキリスト教的概念があると指摘している。これらの概念は感情に対する能力であり、神に従う者の特徴でもある。<sup>24</sup>それゆえに、いわゆる「理性」と単純にとらえるべきではなく、その取り扱いには注意が必要である。それゆえ、大学生としての理性の具現は、場合によって間接的にとらえられなければならない。

オリンピアと出会った後、父の病気を期に帰郷し、王宮に仕え始めると、仕事の忙しさ、さらに郵便の事故によりオリンピアとの連絡が途絶え、カルデニオは彼女の信頼を失う。その間にオリンピアの気をひいたのは、一度夜這い騒ぎを起こしたリュサンダーだった。オリンピアは彼に好意を抱いたわけではないが、カルデニオと音信不通になった今、リュサンダーが現れたのは天の意志だととらえ、彼を夫とする。これに逆上したカルデニオは復讐のためボローニャに戻ってきたところから舞台が始まる。

復讐の念にとらわれたカルデニオは、リュサンダー殺害のために忍び込んだ屋敷、さらに誘導されてきた教会の地下墓地で二度、亡霊と遭遇する。この超常的現象を神の啓示と捉えたカルデニオは最後に、自らの非を認め、オリンピアに謝罪をするところで作品は幕を閉じる。以下、カルデニオの最後の謝罪である。

おお、この時の奇跡よ、わたしのみが称え、  
かつて常に追求した時の。オリンピエ、赦したまえ、  
我を忘れ、おまえ、そして自身を見誤った男を  
狂ったライオンとして汚れなき子羊のお前を追いかけた男を  
わたしはお前のもっとも厳しい敵だった。そして、わたしにはわたしが愛していたと思  
えていたとき、  
もっとも美しきおまえはわたしを愛した、おまえはひどく悲しんだようにわたしには思  
えた。  
今、わたしはおまえの規律と無類の榮譽を賞賛する、  
それに対してわたしは盲目だった、そしてますます猛進した  
自らの破滅へと。(中略)  
そしてわたしにまだおまえの苦痛を和らげるものが欠けているなら、  
オリンピエの勝利がわたしの規範となるべきだ。

O Wunder diser Zeit / die ich allein erhebe  
Vnd vorhin stets verfolgt; *Olympe* sie vergebe /  
Dem der vor ausser sich / sie / und sich selbst verkennt /

---

<sup>24</sup> Vgl. Paulin, ebd. S. 24f.

Der als ein toller Löw / ihr keusches Lamb / nachrennt:  
 Ich war ihr grimmster Feind; als mich bedauert ich liebte;  
 Sie schönste liebte mich / mich dünkete sie betrubte.  
 Jtzt lob ich ihre Zucht und unvergleichlich Ehr;  
 Vor disem war ich blind und rast je mehr und mehr  
 Nach eignem Vntergang. (...)  
 Vnd mangelt mir noch was zu dampffen deine Pein;  
 So soll *Olympens* Sig des meinen Richtschnur seyn. (C 305)

カルデニオはオリンピアに対して、はっきりと自らの過ちを認め、荒々しく行った復讐の企てを破滅への道だったと悔い、オリンピアのために態度を改めることを誓う。『カルデニオとツェリンデ』は決して複雑な筋をたどる作品ではないため、ルネサンス期における完璧と思える一人の人間の慢心と、一時の激情から我に返り改心するという比較的単純な解釈は妥当なものである。その一方で、学問や合理的思考への懐疑は、作品の背景に含まれ暗示的であり、マナックの解釈は問題提起のレベルに留まっている。これを補足するには、テキストのより深い検討が必要だろう。

### 3. 近代化後の大学生—アルニム『ハレ』<sup>25</sup>

続いて、アルニムの『ハレとエルサレム』の第一部『ハレ』について述べていく。まず、作品の舞台についてである。アルニムがグリューフiusに魅了され、彼の作品を再評価しようとした際、グリューフiusと同様に作品の舞台をオリジナルから変更した。ハレは、初代プロイセン王フリードリヒ一世が、ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ三世であった時代の1694年に大学が設立され、これはドイツで最初の近代的大学と呼ばれる。しかし、大学街であるならば、アルニムはもう一つの選択肢、自分と縁のある地を選ぶという選択肢もあった。以下、作品冒頭の献辞である。

<sup>25</sup> 作品からの引用は Ludwig Achim von Arnim: Halle und Jerusalem, In: Dramen von Clemens Brentano und Ludwig Achim von Arnim, hrsg. v. Paul Kluckhohn. Deutsche Literatur, Reihe Romantik, Band 21., Leipzig (Reclam), 1938, S. 48–298.に拠る。同書からの引用は(H 48)の様に頁数を示す。



我が友人と相方  
C. プレンターノと J. ゲレスに  
捧ぐ  
ハイデルベルクの好き日、嫌な日の記憶に基づく  
二つの喜劇からなるこの悲劇を

作者

Seinen Freunden und Gevattern  
C. Brentano und J. Görres  
widmet  
dieses Trauerspiel in zwei Lustspielen  
zur Erinnerung guter und böser Tage in Heidelberg  
der Verfasser.  
(H 48 下線強調は筆者による)

実際には、ハレにも短期間、在籍していたことがあったものの、彼の学生時代の思い出は良くも悪くも「ハイデルベルク」にあったことが献辞から読み取れる。それにもかかわらず、彼はハレを作品の舞台として選んだ。その理由を彼は、作品のまえがきに示唆している。グリューフィウスの作品からの大幅な改編についてアルニムは、今の時代に合わせたことを強調している。作中に出てくる地名や人物を踏まえれば、時代設定が十九世紀初頭にされているのは明白である。この意図に沿った舞台として大学街を用いるならば、古き大学であるハイデルベルクよりも近代の大学であるハレの方が適切という判断だったであろう。

作中では、グリューフィウスと対比して学生生活の場面があふれている。作品の冒頭、大学生がたむろするハレのマルクト広場が場面となる。配役に記されている大学生は9人、さらに無名の大学生が指示されており、<sup>26</sup>多くの学生が登場し、彼らの会話、学者による論争、酒場、学生オルデンの集会の場面など、多くの学生生活の場面が演じられる。それらの場面での大学生の全体的雰囲気は、「だらしなさ、傲慢、不安定という特徴」<sup>27</sup>によってまとめられている。冒頭のト書きにすでにその様子が記されている。

第一幕

第一場

中央広場。一方の脇に三人ばらばらの馬貸しが日に当たっている。他方の脇に二つの屋台が花と果物で一杯にあふれている。女将はサクランボを数えて紙袋に入れている。パ

<sup>26</sup> Vgl. Arnim, Halle und Jerusalem, ebd. S. 49.

<sup>27</sup> Paulin, ebd. S. 77.

ンフィロ、ディーネマン、ズピウス、マイヤー、ベッカー、孤児院出の学生、近郊出身学生、マギスターが、だらしなく、屋台の前のソファや椅子にぼらぼらと座って、食べるでもしゃべるでもなくしている。劇場の背景には古い大学の建物が見え、門扉は開かれている。一人の書籍商によって論文や有名な学者の肖像が掲げられている。

Erster Aufzug

Erster Auftritt

Der Marktplatz. Auf der einen Seite stehen drei einsame Pferdeverleiher in der Sonne, auf der andern die beiden Gevatterbuden mit Blumen und Früchten reichlich angefüllt; die Gevatterin zählt Kirschen in Papiertüten. Pamphilio, Dienemann, Suppius, Mayer, Becker, ein Waisenhäuser, ein Kümmeltürke, ein Magister liegen nachlässig auf dem Sofa und auf den Stühlen vor der einen Bude umher und essen so wenig, als sie sprechen. Im Hintergrunde des Theaters erscheint das alte akademische Gebäude, der Torweg ist geöffnet, es werden von einem Buchhändler Dissertationen und Bildnisse berühmter Gelehrten ausgehangen.

(H 50 強調下線は筆者による)

学生たちがたむろしているこの場面は、大学町の雰囲気がどのようなものか、一言「だらしがない」という言葉が物語っている。同時代性を重視した構成は、アルニムの当時の学生たちへの批判的態度に基づいているかもしれない。少なくとも、日常で過ごしている大学生はあまり褒められたものではなく、品位にかけた態度を示している。

その一方で、この作中でのカルデニオは突出した人物として登場するが、グリューフィウスにおける乱暴な大学生とは設定が若干異なる。彼はハレ大学の「若き私講師」(ein junger Privatdozent)(H 49)であり、一大学生よりも高位な大学人となっている。ここを強調すればカルデニオを大学生と呼ぶのは不適切かもしれない。しかし彼は同時に学生グループである「オルデンの首領」(Ordensvorsteher)(H 64)をつとめている。そのため彼は大学生の輪の中になじんでおり、学生の面をもっていると考えるのは必ずしも間違いではない。

さらに細部に注目すると身分の違いも明らかとなる。カルデニオの出自についてグリューフィウスは貴族の出身とし、父親あるいは両親との密接な関係について明示していた。これに対して『ハレ』ではカルデニオの出自ははっきりと語られておらず、第二部の伏線として暗示されるだけに留められている。グリューフィウスが両親の願いに言及するように、学問への情熱は貴族社会の理想に端を発するものだったのに対し、アルニムでは、学問へのモチベーションとして家族は関係していない。

カルデニオの普段の素行については、概ねグリューフィウスが強調する傲慢な性格を受け継いでいる。その一方で、作品冒頭ですでに復讐の念に捕らわれた者を描いたグリューフィウスとは違い、アルニムはカルデニオの心情や心理の変化に作品の多くの部分を割いている。冒頭の広場の場面からカルデニオの登場、オリンピエとの出会いと破局まで、グリュ

ーフィウスは独白による状況説明のみだった点を、全面的に戯曲の筋として構成し直している。

作中でのカルデニオについては、オリンピエの兄で法学教授ヴィーレンが以下のように評価している。

カルデニオは、否定はしないが、何千の中でもぬきんでており、自然によって高められ、芸術に彩られている。だが、一つの欠陥がすべての長所を消し去っている。彼は怒れる暴君で、普段の世の流れでは害がないと我慢されている極めてささいなことに対する闘士だ。そして思ったことをその場で言うてしまうし、望んだことをやり通す。誰もが彼を恐れ、誰一人、彼は恐れていない。彼の学問的名声だけが、彼を学外追放からかばってきた。彼にすべての核心が、一つのアカデミー全体が備わっていなければ、とくに学生たちから締め出されていただろう。酒を飲むときはまず回りの人間を、永遠に兄弟の交わりを結ぼうとするかのように抱き寄せ、鼻につくほどそばで相手を眺め、微細な顕微鏡的特徴に気づき、軽蔑して突き飛ばすのだー私自身そう対応された、ひどい諍いになる前に軽く気を利かせて逃げ出して、事なきをえたがね。

Cardenio, ich leugne nicht, ist ausgezeichnet unter Tausenden, erhöht von der Natur, geschmückt mit Kunst, doch löscht ein Fehler alles Gute aus. Er ist ein zorn'ger Wütrich, ein ew'ger Streiter gegen tausend Kleinigkeiten, die der gewohnte Lauf der Welt als harmlos duldet, und was er meint da sagt er aus, und was er will, das setzt er durch, ihn fürchtet jeder, keinen fürchtet er. Nur sein gelehrter Ruf hat gegen die Verbannung ihn beschützt, er wär' von den Studenten längst schon ausgeschlossen, wär' nicht in ihm der Kern von allen, eine ganze Akademie. Beim Trinken drückt er erst die Menschen an sich, als wollt' er sich für eine Ewigkeit verbrüdern, nun sieht er sie in hellster Nähe an, bemerkt die feinen mikroskop'schen Züge und stößt sie mit Verachtung fort – mir selbst ist's so begegnet, ich rettete mich nur von einem großen Streit durch einen witzig leichten Seitensprung. (H 69f.)

自らの才能へのうぬぼれなのか、カルデニオは自らの意志を貫く闘士として評される。そこに同時代の大学生のプライドとも言うべき原理が加えられている。その具体例として示唆されるのはカルデニオの女性との距離間である。

その無遠慮さに、おまえたちが愛と呼ぶものに身を任せるべきか否か、わたしにはおよそ疑わしい。結婚のくびきはいとわしく、わたしの自由を奪う。わたしができる奴であるかぎり、それについては何もない。何が今わたしの満足に残っているのか？いかがわしい墮落した娘たちを厭い、軽蔑する、わたしは他の人間の残り物にはもったいない、そして、無垢な娘、彼女たちがわたしを思わず畏敬にひれ伏せたい気持ちに、多くの同

情にひれ伏せたい気持ちにさせる、なぜなら、わたしは彼女たちをわたしの生、わたしの自由で購いたくはないからだ。

Fast zweifle ich, ob ich wohl je mich der Vertraulichkeit ergebe, dem, was ihr andern Liebe nennt. Das Ehejoch ist mir verhaßt, es nimmt mir meine Freiheit. Nichts davon, solange ich noch ein flinker Kerl. Was bleibt mir nun zu meiner Lust? Die schlechten und verdorbnen Mädchen hasse und verachte ich, ich bin zu gut für andrer Leute Rest; unschuldige, die flößen mir zu viele Ehrfurcht ein, so vieles Mitleid, da ich sie nicht mit meinem Leben, mit meiner Freiheit nicht erkaufen mag. (H 53f.)

これは、噂の美女オリンピエを話題にする学生たちとの会話で、カルデニオが発した意見である。彼は女性とかかわることは常にコストであり、身を持ち崩さない程度に付きあうべきだ、と学生たちを説得する。さらにオルデンの集会で交わされるあいさつでは次のように発言する。

カルデニオ。よろしく、諸君！同志マーシャル、世俗の者たちの侵入から守られているか確かめよ。

マーシャル。守られています。

CARDENIO. Euch allen Gruß! Der Bruder Marschall untersuche, ob wir gesichert gegen Einbruch Ungeweihter sind.

MARSCHAL. Wir sind gesichert. (H 152)

学生オルデンとは、啓蒙期に出現した秘密結社の影響を受け、十八世紀後半に発生した大学生によってのみ構成された結社である。<sup>28</sup>啓蒙主義の影響下で世界全般の改革を目的に十七世紀には、フリーメーソンや薔薇十字団などの結社が確認されているが、これらの影響を受けつつ、独自に学生たちによって学生オルデンが作られた。中世騎士団をさすオルデンとはまったく別の団体である。啓蒙時代の産物ではあるが、神秘主義的儀礼などを取り込んでおり、啓蒙を代表するというよりは啓蒙主義から派生した亜種といわれる。<sup>29</sup>

学生オルデンの首領としてカルデニオは、世俗の日常に距離を置き、自らを律して生活してきた。その背景の一つとして、このオルデンがあった。さらにはその暴力的なリーダーシップで学生たちに彼と同じように振る舞うよう要求してきた。

しかし、カルデニオが実際にオリンピエと出会ってから、この態度は一変する。彼女を目

---

<sup>28</sup> 菅野瑞治也、前掲書、3頁参照。

<sup>29</sup> Vgl. Ulfert Ricklefs: »Ahasvers Sohn«. Arnims Städtedrama »Halle und Jerusalem«. In: Universelle Entwürfe – Integration – Rückzug: Arnims Berliner Zeit (1809-1814), hrsg. v. Ulfert Ricklefs, Tübingen (Niemeyer), 2000, S. 204.

の前にして彼はあっさりと一目惚れをし、その日の晩には彼女の家の前で歌と芝居を披露しに向かう。すべては順調に進むと思われた矢先、リュサンダーの夜這いから、状況は一変し、結局オリンピエはリュサンダーを選ぶ、という流れがアルニムの描いたカルデニオの破局の事情である。

この破局に絶望したカルデニオは、リュサンダーへの復讐を誓う。それと同時に、今や激情の虜になったカルデニオはこれまでの態度を精算し、学生たちに強いてきた気位の高い学生オルデンでの態度が真実ではなかったことをぶちまけ、オルデンの学生たちを逆上させる。

しばしば諸君に、生からの出口を開けておけ、といってきた、私自身それを信じていた、わたしの生の狭い領域の中で、そのときまでそうだと思えた。今、わたしは諸君に確信を持って言おう、わたしは嘘をついていた、諸君を騙したのだ。ほどけるように思われるが、われわれを生にしっかりと結びつけている枷があり、出口は完全に消滅していく。いくつもの愛と復讐の呪縛があり、秘伝の書がわれわれに大胆に約束したあの魔術よりも強い。

Oft sagt' ich euch, der Ausgang aus dem Leben bleibe frei, ich hab' es selbst geglaubt, im engen Kreise meines Lebens war's bis dahin also mir erschienen, jetzt sag' ich euch mit fester Überzeugung, ich log, ich habe euch betrogen, es gibt so wunderbare Fesseln, die uns dem Leben fest verbinden, indem sie es zu lösen scheinen, daß uns der Ausgang ganz verschwindet, es gibt so manchen Bann der Liebe und der Rache, der stärker ist als jene Zaubereien, die uns geheime Bücher kühn verheißen. (H 152f.)

カルデニオは、これまでの築いてきた自らの信念の崩壊を体験し、激情への身を任せる事で、今まで学生たちに要求してきた大学生としての矜持を捨てたかのように思える。しかし、学生オルデンという存在は、作者アルニムにとって前時代的なものだったという評価がある。<sup>30</sup>啓蒙主義を背景に生まれた学生オルデンだが、実際には合理的思考の団体とはいいがたく、必ずしも近代の進歩的思想と相容れる存在ではなかった。少なくとも、カルデニオと学生オルデンとの関係の破綻は、カルデニオの傑出した才能を否定するものではない。

カルデニオの態度の変貌後、紆余曲折を経て、ハレ編の最後ではカルデニオと、オリンピエ、リュサンダー夫妻の和解が実現する。オリンピエが自分の心境がどのように変化したかを説明し、それを理解したカルデニオは復讐心をあっさりと収め、第二部の巡礼の旅へと気持ちを切り替える。この和解は、カルデニオの激しかった心情の良化と、ある種の改心としてグリューフウィスの結末と重なる。しかしこの和解の直前に、彼が以前犯した罪について、

---

<sup>30</sup> Ebd. S. 205.

一切、良心の呵責を感じていないことが告白される。破局によって動揺している間にカルデニオは、間接的な場合も含めて、四人の男を死に至らしめる。グリューフiusの結末では、カルデニオが自らの視野狭窄的な慢心を恥じていたのとは対照的である。

わたしは、わたしが避けることのできなかつたすべてに対して、自分を責めはしない。万物の父の法廷に立とう。四人の怪物を根絶した。賭博師とユダヤ人は、明るい若者たちの高貴なる無分別を悪意のある裏切りによって待ち構え、欺瞞と策略で多くの気高い魂を、天へと羽ばたく大胆な飛翔の瞬間から低俗な犯罪へと突き落としたから。ニセの哲学者は、自らの精神の誤りを世界の法則にしようとしたから。ニセの説教師は自らの魂に、神の言葉として邪悪な欲望を明かそうと考えたから。わたしはこの点ではただ神の裁きの剣だったにすぎぬ。

Ich mache keinen Vorwurf mir aus allem, was ich nicht meiden konnte, dem Vater aller Wesen steh' ich zum Gericht, vier Ungeheuer hab' ich ausgerottet, den Spieler und den Juden, weil sie den edlen Leichtsinns froher Jugend mit tückischem Verrat belauern, mit Trug und List so manche hohe Seele aus kühnem Aufflug, der zum Himmel streifte, in niederes Verbrechen hingestürzt, den falschen Philosophen, weil er die Schiefheit seines Geistes aller Welt zur Regel geben wollte, den falschen Prediger, weil er der eignen Seele böse Lust als Gotteswort zu offenbaren meinte, ich war hier Gottes Richtschwert nur. (H 185f.)

カルデニオは四つの殺人を、天の代わりに執行したのだと宣言する。神に対しての正当性をカルデニオは信じて疑わない。この神の代理人のモチーフは、作品発表前のまがきにおいてアルニム自身が言及しており、カルデニオの特徴のとしては注目に値する。その一方で彼のこの発言は、物語の結末における伏線であると同時に、その発言自体の自己矛盾をも孕んでいる。後半部『エルサレム』で明かされるのは、カルデニオの出自である。作中に登場するさまよえるユダヤ人アハスヴェールは、かつて巡礼者のギリシャ人であった女性を襲い、無理矢理に妻とした。その間に生まれたのがカルデニオである。この真相が明かされた後、洗礼されたユダヤ人としてカルデニオの改心が物語の結末を飾ることになるが、この事実はカルデニオの神の代理人としての資質に疑問を起こさせる。上記の引用で「ユダヤ人」を糾弾することに正当性を与えるのは、彼が非ユダヤ人であるという認識ではないだろうか。しかし、悪辣な特性を与えられた強欲なユダヤ人を罰するのが、同じユダヤ人であるという点は、違和感をぬぐえない。また、彼の告白からは、本質的にはカルデニオに改心の兆しは見られない。少なくとも『ハレ』編では、大学人として、理性と合理を後ろ盾とするカルデニオは、神に赦しを請い、改心をすることはなかった。この点については、後半『エルサレム』に持ち越されるのだが、グリューフiusと比較した場合に、オリンピエとの和解はきっかけとはならず、大学人であったカルデニオはハレ編において一貫した人物像を保持

したままである。

#### 4. まとめ

グリューフイウスの『カルデニオとツェリンデ』では、彼の他の戯曲とは異なり、王族による国家的な題材や殉教者のモチーフではなく、激情にとらわれ冒険的な行動をとる大学生とその改心がテーマとなっていた。それゆえ〈大学生カルデニオ〉は、グリューフイウス作品の中でも特異な登場人物といえるだろう。

また彼の改心は、劇中で当時の死生観、厭世観によって演出されており、悲喜劇的な雰囲気を作り出している。その背景として、明確な批判ではないが、ボローニャという舞台設定が理性や学問への懐疑を暗示している可能性がある。

アルニムは、グリューフイウスを下地に『ハレ』編を作り上げた。彼は同時代の大学街としてハレを適切な舞台と考えており、グリューフイウスとは対照的に、大学生が数多く登場し、多くの場面で彼らの行動や習俗が扱われている。大学生像については、全般的にネガティブな印象が与えられている。

『ハレ』のカルデニオは、私講師のため厳密には大学生ではないが、作品の演出から十分大学生像の一つとみなすことができる。その一方で、グリューフイウスで取り入れられていた身分や家族、血縁との関係は、ハレの大学人としてのカルデニオの背景には取り入れられていない。

また、多くの部分が人物の心理的变化に割かれてはいるが、グリューフイウスの作品のテーマとなる改心は、十九世紀の大学人としてのカルデニオには生じることがなかった。さらに、物語の結末で明かされる彼の出自から、『ハレ』編の結末におけるカルデニオの態度には、皮肉とも批判的ともとれる傲慢さが仕込まれている。

#### 一次文献

Ludwig Achim von Arnim: Halle und Jerusalem, In: Dramen von Clemens Brentano und Ludwig Achim von Arnim, hrsg. v. Paul Kluckhohn. Deutsche Literatur, Reihe Romantik, Band 21., Leipzig (Reclam), 1938, S. 48 – 298.

Andreas Gryphius: Cardenio und Celinde, In: Gryphius Dramen, hrsg. v. Eberhard Mannack, Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker), 1991, S. 227 – 306.

#### 二次文献

Nicola Kaminski u. Robert Schütze (Hrsg.): Gryphius-Handbuch. Berlin / Boston (De Gruyter), 2016.  
Eberhard Mannack (Hrsg.): Kommentar (zu Gryphius Dramen, „Cardenio und Celinde“), In: Gryphius Dramen, ebd. S. 963 – 998.

Herbert Nimtz: Motive des Studentenlebens in der deutschen Literatur von den Anfängen bis zum Ende des achtzehnten Jahrhunderts. Würzburg (Triltsch), 1937.

Roger Paulin: Gryphius ‚Cardenio und Celinde‘ und Arnims ‚Halle und Jerusalem‘. Tübingen (Niemeyer), 1968.

Ulfert Ricklefs: ›Ahasvers Sohn‹. Arnims Städtedrama »Halle und Jerusalem«. In: Universelle Entwürfe – Integration – Rückzug: Arnims Berliner Zeit (1809-1814), hrsg. v. Ulfert Ricklefs, Tübingen (Niemeyer), 2000, S. 143 – 244.

菅野瑞治也：ブルシエンシャフト成立史（春風社）2012。

## **Ein Vergleich zwischen zwei Cardenio-Figuren — Aus Gryphius’ „Cardenio und Celinde“ und Arnims „Halle“.**

Hajime OZAKI

Dieser Aufsatz behandelt eine Figur: die Cardenios in den beiden obengenannten Werken.

In Gryphius’ „Cardenio und Celinde“ geht es um einen Studenten, der leidenschaftlich und frevelhaft handelt, und um seine Bekehrung. Auch wenn es in diesem Werk keine ausdrückliche Kritik gibt, kann die in Bononien spielende Rahmenhandlung eine gewisse Skepsis gegenüber der Vernunft ausdrücken.

Arnim bearbeitete Gryphius’ Drama in seiner Version „Halle“. Er hielt Halle für den passenden zeitgenössischen Schauplatz. Im Gegensatz zu Gryphius treten in diesem Werk viele Studenten auf, und viele Szenen handeln von deren Verhalten und Gewohnheiten. Das Bild der Studenten wird im Allgemeinen in einem negativen Licht dargestellt.

Der Cardenio in „Halle“ ist zwar kein Student im eigentlichen Sinne, sondern Privatdozent, aber die ganze Inszenierung suggeriert, dass er ein Student ist. Andererseits fehlen hier die Beziehungen von Stand, Familie und Verwandtschaft, die in Gryphius’ Werk aufgenommen wurden, als Hintergrund für die Hauptfigur.

Und obwohl ein großer Teil von Arnims Drama den psychologischen Haltungen der Figuren gewidmet ist, vollzieht sich bei Cardenio im 19. Jahrhundert keine Bekehrung, wie dies in Gryphius’ Werk der Fall ist. Aufgrund seiner Herkunft, die am Ende des zweiten Teils („Jerusalem“) enthüllt wird, ist Cardenios Haltung im Abschnitt „Halle“ von Hochmut geprägt, sodass man hier ironische und kritische Aspekte erkennen kann.